

FD NEWS

No.18 2006年9月30日

摂南大学 FD 委員会
〒572-8508 寝屋川市池田中町 17-8
TEL: 072-839-9106
E-mail: kyomu@ofc.setsunan.ac.jp

摂南大学

FD 活動とホームページ公開

FD 委員会 (SG3 担当) 工学部 渡会征三

今や大学における FD 活動も当たり前前の取り組みになってきて、各大学は競ってその成果を内外に公開・宣伝している。公開の方法は色々あるが、本学でも 2006 年春に「摂南大学 FD 活動報告集 (2002 年度～2004 年度)」を刊行している。公開方法で広く用いられているのが、ホームページ上での閲覧であろう。Yahoo の検索で試しに「FD 委員会 FD 活動 ホームページ 公開」のキーワードで調べたら、38 件ヒットした。その中の主な大学の内容を覗いた感想を述べる。(以下で T はトップページを指す)

「北海道教育大学旭川校」では T～FD 活動紹介を辿ると FD 委員会による色々な活動報告・紹介が見られる。10 名ほどの教員が自分の授業アンケートの結果・分析を公開しており、学内外を問わず他の教員の参考になる。 「静岡大学」では T～広報誌・情報公開・個人情報保護～FD プロジェクトを辿って FD プロジェクト 2006 の作成したページに着く。公開されているものと学内のみの内容が半々で、授業アンケート結果の内容は外部には非公開である。「金沢大学」では T～学部・大学院・施設～大学教育開発・支援センターを見たがこのページには FD という文字は見当たらず、いわゆる広報活動の紹介でその記事中に FD 報告がある。「明治大学」では T～教育～教員(FD)～授業改善のためのアンケートを見ると、結果は学外非公開であるが、教員と学生の声(本学でいう自由記述欄)が公開されていて興味深い。「玉川大学」は T～大学～大学 FD 活動のページで活動の紹介と授業評価アンケートを公開しているが内容は大まかな分析結果である。「大阪産業大学」では T～FD 活動～FD レポート(FD 委員会ホームページ管理者が副学長となっている)が辿れ、新鮮味を覚えるのはその中に{教え上手な教員表彰制度}があり、何人かの表彰教員の紹介がなされていることである。授業アンケート結果は学内のみ閲覧可能である。

以上の例のように多くの大学で積極的に FD 活動宣伝をしているが、旧帝大クラスの大規模大学となると、FD 委員会という一時的な教職員グループによる活動ではなく、学科若しくは学部規模の専門部署を設置し教育改革や開発研究に関する全般について取り組んでいるようである。例えば京都大学では『高等教育研究開発推進機構』とか『高等教育研究開発推進センター』の名称の部署が設けられていて教養教育推進等々とか教育システムの開発やそれに関する研究交流等々を担当し、その活動については独自のホームページで大々的に紹介している。(九州大学については FD ニュース No.13 の寄稿記事参照)。

さて摂南大学ではホームページによる発信はまだなされていないが、2004 年度全学 FD 委員会で FD ホームページ開設について議論されている。2005 年度では開設する方向で継続審議となったが、今年度の SG3 ではホームページの FD 委員会内部試用版を立ち上げてその実施に向けて検討中である。

2006年度前期 「学生による授業アンケート」実施結果

F D委員会 (S G 1) 工学部 川野常夫、 一色美博

実施状況

2006年度の学生による前期授業アンケートが、前期末の6月23日(金)~7月6日(木)の2週間にわたって実施された。対象は本学の全学部・学科(T部C, A, E, M, Bの各学科およびL, I, Y, Jの各学部)^{注1)}である。2005年度から授業アンケートは、教員全員の科目について実施するのではなく、教員コード番号の奇数, 偶数によって2グループに分けて実施されてきた。2005年度の前期, 後期は、それぞれ教員コード番号が奇数, 偶数の教員が担当する科目を対象として実施されたので、今回の前期アンケートでは、昨年度の前後期の順を逆にして、教員コード番号が偶数の教員が担当する科目を対象とした。ただし、これまでと同様にC科のみ全科目について実施された。

アンケートの内容は、学生が答え易いように2005年度に実施された内容に一部修正が加えられた。まず、共通質問項目は1項目追加され、設問1~7となった。設問8, 9は学部個別質問項目として設けられたが、実際に設問を設けるかどうかは各学部の意向に任せられた。設問10~14は各科教室個別質問項目、あるいは教員個人用の項目として設定された。この場合も実際に設問を設けるかどうかは、それぞれの意向に任せられた。一方、自由記述式の回答欄は、今回大幅に変更された。学生が答え易いように以下の4項目に細分し、それぞれについて回答するスペースが設けられた。

- (1) この授業の満足できた点：
- (2) この授業の改善すべき点：
- (3) この教室(教室)の設備などの改善すべき点：
- (4) その他の感想など：

今回(2006前)^{注2)}の授業アンケート参加教員比率は93.5%(2005後99.1%, 2005前100%, 2004後98.9%)であった。アンケート対象授業科目数は606科目。従来の授業科目数は、2005後681科目, 2005前660科目であった。回答者延人数は20,126人(2005後18,607人, 2005前24,407人)。その回答率(回答者延数/履修登録者実数)は69.4%(2005後58.4%, 2005前64.9%)であった。回答者延人数は2005後と比較して約8%の増, 2005前より約18%の減となっている。回答率は2005後よりも11ポイント, 2005前よりも4.5ポイントの増となっている。参加教員数や学生の回答者数のこのような増減は、一時的なものと思われるが、今後どのような傾向をたどるかは、今後の調査結果を待たねばならない。

注1...T:工学部(C:都市環境システム工学科, A:建築学科, E:電気電子工学科, M:機械工学科, B:マネジメントシステム工学科), L:外国語学部, I:経営情報学部, Y:薬学部,

」：法学部

注2...上記本文の()内では、2005年度前期、後期をそれぞれ、2005前、2005後、
2004年度後期を2004後と記している。以下、同じ。

アンケート結果概要

学部・学科ごとの評価の最小値・最大値・平均値および設問7との相関係数を表1に示す。今回は、設問6「この授業を受講した教室の設備は整っていた。」がひとつ増えて7項目となっている。また、設問3は、昨年度まで、「教員は、学生からの質問や疑問に誠実に答えていた。」であったが、「教員は、熱意を持ってこの授業を進めていた。」に変更された。したがって、過去のデータと比較するとき、注意が必要である。表のうち、[]内の数値は2005年後期、{ }内の数値は2005年度前期、()内の数値は2004年度後期の数値をそれぞれ表している。

| 問 | 項目 | 最小値 | 最大値 | 平均値 | 相関係数 |
|----|--------|------------------------|------------------------|------------------------|------------------------|
| A1 | 出席状況 | 4.24[4.12][4.27](4.18) | 4.68[4.66][4.66](4.59) | 4.46[4.41][4.47](4.39) | 0.14[0.14]0.14 |
| A2 | 学生の意欲 | 3.62[3.65][3.64](3.75) | 4.07[4.04][3.94](4.04) | 3.87[3.90][3.80](3.88) | 0.60[0.61]0.62 |
| A3 | 教員の熱意 | 3.88[3.75][3.61](3.73) | 4.30[4.24][3.96](4.10) | 4.00[3.92][3.78](3.87) | 0.71[0.75]0.74 |
| A4 | 教員の工夫 | 3.58[3.70][3.52](3.64) | 4.10[4.17][3.83](4.03) | 3.74[3.80][3.69](3.78) | 0.79[0.81]0.80 |
| A5 | 教員の話し方 | 3.51[3.55][3.47](3.54) | 4.04[4.15][3.78](4.02) | 3.64[3.73][3.62](3.72) | 0.80[0.83]0.81 |
| A6 | 設備 | 3.60 | 4.05 | 3.75 | 0.54 |
| A7 | 学生の満足度 | 3.55[3.58][3.47](3.62) | 4.05[4.15][3.78](4.04) | 3.70[3.78][3.62](3.77) | - |

表1 学部・学科ごとの評価の最小値・最大値・平均値および設問7との相関係数

-1 学生の評価

表1より、今回の設問の中で、最小値、最大値、平均値のいずれも高い評価値を示しているのはA1の「出席状況」であるが、A7の「学生の満足度」との相関は他とかけ離れて最小の値となっている。これは、出席はしているが、そのことが満足度とは無関係であることを意味している。このような傾向は、過去の3期も同様となっている。次に高い評価値を示しているのは、A3「教員の熱意」である。この設問は昨年までとは表現が異なるため、単純に比較はできないが、過去3期のいずれの値よりも大きい値となっている。この評価が高いのは、多くの教員が熱意を持って真剣に授業に取り組んでいることの表れであると考えられる。学生の満足度との相関係数も0.71と高くなっている。

一方、A1からA7の中で評価値の最小値、最大値、平均値がいずれも低かったのはA5の「教員の話し方が明瞭でわかりやすかった」である。平均値が3.64となっていることから「明瞭でわかりやすい」先生と「そうでない」先生がほぼ半々に分かれていることがわかる。先に述べた「熱意」に関する評価と合わせると、「授業に対する熱意の感じられる先生でも、話し方がわかりにくい先生がおられる。」ということになる。

設問 A6 以外の 6 つの質問項目の平均値は 2005 年度前期の実施結果のものと比較すると、A1「出席状況」0.01 ダウン、A2「学生の意欲」0.07 アップ、A3「教員の熱意」0.22 アップ(参考値)、A4「教員の工夫」0.05 アップ、A5「教員の話し方」0.02 アップ、A7「授業の満足度」0.08 アップと 6 項目中 5 項目でアップしており、平均で 0.07 アップしている。

- 2 アンケート結果の分析

-2-1 出席率および学生の意欲の違いによる比較

出席率のよい学生とよくない学生でアンケート結果がどのように異なるか、また、授業に対する学生の意欲の高い学生と低い学生でどのように異なるかを分析した。出席率については、設問 1 で 40%以上と回答した学生と 40%未満と回答した学生に分けて、A1 から A9 の各設問における評価の平均値と標準偏差を求めた。また、学生の意欲については、設問 2 の回答が評価 3~5 の学生(意欲あり)と、評価 1 または 2 の学生(意欲なし)に分けて、同様に A1 から A9 の各設問における評価の平均値と標準偏差を求めた。

この結果、出席率のよくない学生は、学生自らの評価も教員に対する評価も否定的であることがわかった。これは出席をしていない学生がまともに回答できていない表れであると考えられる。言い換えれば、出席率の低い学生は授業に対して正当な評価ができないため、集計から除くべきであると考えられる。しかし出席率が 40%未満の述べ人数は 168 名で、40%以上の 19,927 名に比べて 1%にも満たないため、大勢には影響がないことがわかった。また、意欲の少ない学生も全体的に否定的な回答をしていることがわかった。

-2-2 学生の満足度と諸要因との関係

学生の授業の満足度(質問項目 A7)と諸要因との関係について調査・検討した。

(1) 履修登録者数と満足度の関係

履修登録者を「20 人ずつ」に分けて 11 段階にて調査した。その結果、学部・学科ごとにばらつきがあるものの履修登録者数が増加するにつれておおよそ満足度が低くなる傾向がある(20 人未満の履修登録者の平均満足度は 4.22 と最も高い)。なお、L 部の 200 人以上の履修登録者の授業において 4.67 と高い値となる場合があり、これは担当教員の個人的な特性が現れているものと思われる。全体の平均値では、過去の 3 期と大きな変化は認められなかった。また、人数が少ない場合でも満足度の低いケースも認められ、少人数の授業の場合、評価のばらつきが大きいことが特徴的であった。

(2) 教員年齢と満足度の関係

教員年齢を「5 歳ずつ」に分けて 10 段階で調査した。概ね教員年齢が高いほど満足度は低い値を示している。満足度が最も高いのは「30 歳未満」であり 4.25 であった。しかし、同じ調査対象の 2005 年後期では、「30 歳未満」は 3.71 と低い値であったので、一概に「30 歳未満」がよいとは言えない。また、最も低いのは、「65 歳以上 70 歳未満」の 3.47(2005 後は 60-65 歳で 3.51 であり、2005 前は 60-65 歳で 3.28)であった。過去 3 期と比べるとそれぞれ値が増減しており、

期ごとの傾向は特に認められない。

(3) 職階別満足度の関係

職階を「教授」、「助教授」および「講師」の3区分で本学の専任について調査した。満足度は「教授」3.62 (2005 後 3.69, 2005 前 3.54)「助教授」3.83 (2005 後 3.78, 2005 前 3.8)「講師」4.07 (2005 後 4.22, 2005 前 3.95) の順で満足度は高くなり、職階とは反対となる。

(4) 授業時間と満足度との関係

授業時間を「1限」から「5限」に分けて調査した。学部、学科にて満足度の高い時限は異なっているものの、今回の2006年前期は「1限」の満足度が最も高かった(2005 後は「1限」、2005 前は「2限」)。しかし、「1限」～「5限」の満足度は、3.66～3.78 (2005 後は3.74～3.84) の間に分布しており、時限による大きな違いはないと考えられる。

(5) 選択・必修別と満足度との関係

満足度の関係を「選択科目」と「必修科目」に分けて調査した。満足度の平均は「選択科目」で3.7 (2005 後 3.77, 2005 前 3.64)、「必修科目」が3.8 (2005 後 3.82, 2005 前 3.82) であり、「必修科目」が「選択科目」を平均値では上回っている。これは従来と同じ傾向を示している。

(6) 科目分類別と満足度との関係

科目の分類を「専門」、「専門関連」、「基礎」、「教養」および「教職」の5分類に分けて満足度との関係を調査した。「基礎科目」の満足度が最も高く3.93であった。過去3期ではいずれも「教職」の満足度が最も高い値であったので、今回は例年とは異なる結果となった。また、「専門関連」の満足度が3.4と最も低い。これは過去3期と同じ傾向である(2005 後 3.41, 2005 前 3.42)。なお、「専門」は3.74, (2005 後 3.79, 2005 前 3.66)、「教養」は3.66 (2005 後 3.67, 2005 前 3.57) であった。

-2-3 質問項目間の相関

大学全体の共通質問項目である設問A1からA7までを対象として、互いの相関を調査した。相関係数の中で、0.54以上のものを拾い出し、互いの関係がわかりやすくなるように図式化したものを図1に示す。図では各設問を円周上に配置し、相関係数で0.54以上の関係があるものを、対角線で結んでいる。図から、学生の意欲、教員の熱意、教員の工夫、教員の話し方が明瞭、設備の5項目が学生の満足度と相関があることがよくわかる。すなわち、学生に意欲があって(学生の意欲を高めて)、教員の熱意があり、教員が工夫をし、話し方が明瞭で、設備がよければ、学生は満足するということになる。学生の出席率と各設問との間の相関は認められない。

(学部毎の図は末尾の付録参照)

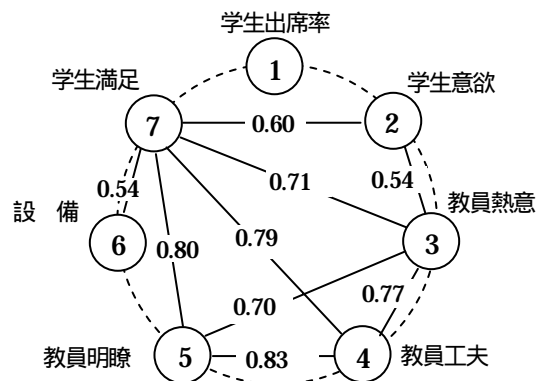


図1. 設問どうして相関の強い関係 (r 0.54)

- 3 結果の要約

学生の評価値の平均値が高かったのは、「自分の出席状況」と「教員の授業に対する熱意」であった。

学生の評価値の平均値が低かったのは、「教員の話し方が明瞭でわかりやすかった」であった。「明瞭でわかりやすい先生」と「そうでない」先生がほぼ半々に分かれた。

出席率のよくない学生、または意欲の少ない学生のアンケート評価は、ほとんどが評価3以下で、否定的であった。

全体として、履修登録者数が少ないほど満足度が高くなる傾向があるが、履修登録者数が少ない科目の評価はばらつきが非常に大きい。

概ね、教員年齢が増すにしたがい、また職階が高くなるほど満足度は下がる傾向を示すもののそれほど顕著なものではない。

授業の開講時限による満足度の違いは認められない。

選択科目より必修科目で満足度は高くなっている。

学生に意欲があつて（学生の意欲を高めて）、教員の熱意があり、教員が工夫をし、話し方が明瞭で、設備がよければ、学生の満足度は高くなる。

おわりに

今回は、教員コードが偶数の教員が担当する科目について、学生による授業アンケートを実施した。奇数・偶数のグループに分けて、3期目となるが、アンケート結果には特に目立った変化はなかった。今回はアンケート結果の分析方法を追加して、出席率の良し悪し、学生の意欲のあるなしで比較などを行った。その結果、出席率のよくない学生、または意欲の少ない学生のアンケート評価は、ほとんどが評価3以下で、否定的であることがわかった。このような学生の絶対数は少ないが、欠席をしている学生を含めて約30%の学生を、今後どのように指導するかが問題である。

また、学生は教員に対して、「先生の熱意」は感じるが、「明瞭でわかりやすい先生」と「そうでない」先生がほぼ半々に分かれる点も、今後どのように対処すべきかを検討する必要がある。これは教育力の問題であると考えられる。

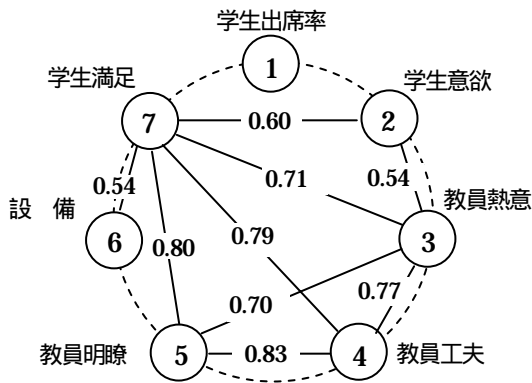
さらに、履修者が少ない、いわゆる少人数教育は、学生の満足度が高いと思われがちであるが、満足度の高い評価がある一方で、低い評価もあることから、少人数教育であっても、学生の満足度を高める工夫が必要であると考えられる。

最後に、アンケート結果の相関分析から、学生に意欲があつて（学生の意欲を高めて）、教員の熱意があり、教員が工夫をし、話し方が明瞭で、設備がよければ、学生の満足度は高くなるという結果が出たが、これはごく当然の結果であり、この当然のことを実行していくことが大事であると思われる。

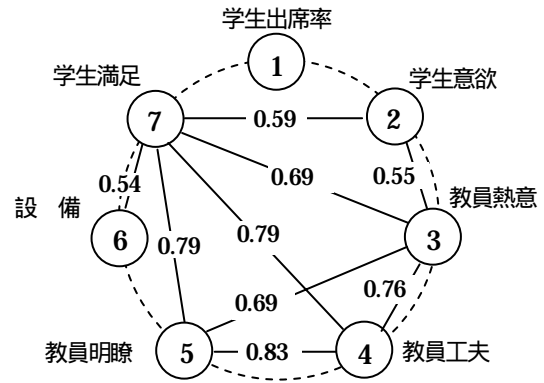
以上

(付 録) 学生による授業評価アンケートにおける設問間の相関

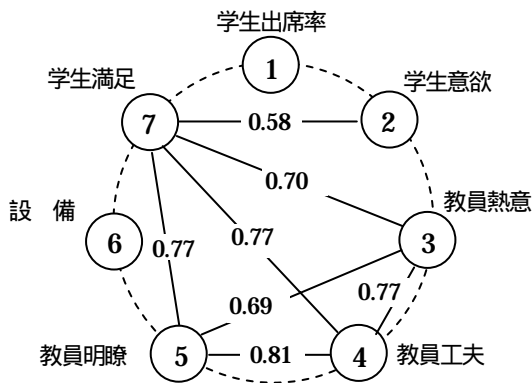
- 2006 年度前期, 各学部における設問どうしで相関の強い関係 ($r = 0.54$) -



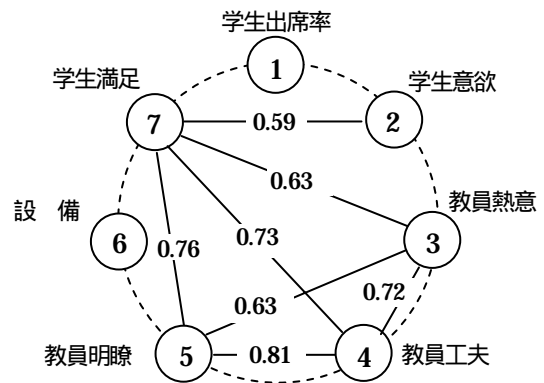
(a)大学全体



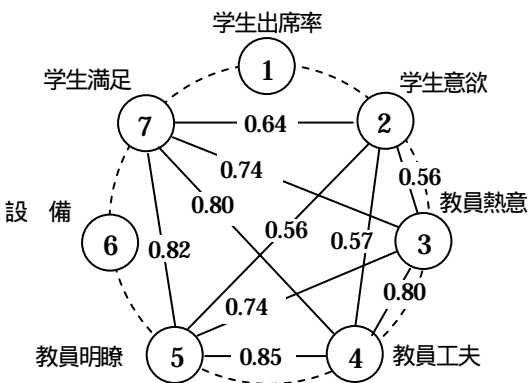
(d)経営情報学部



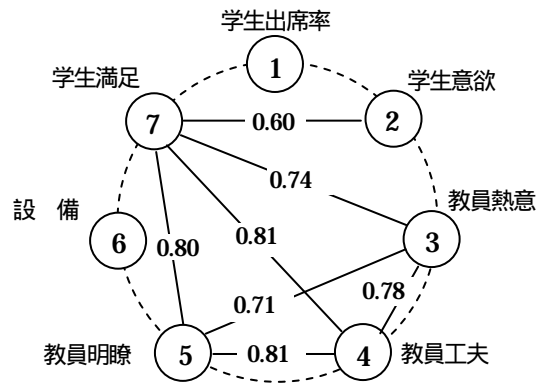
(b)工学部



(e)薬学部



(c)外国語学部



(f)法学部

公開授業を授業公開として活用する（経営情報学部）

FD 委員会委員 経営情報学部 有馬善一

授業公開と公開授業。語順が違っただけですが、内容には違いがあります。前者は公開の対象が同僚の教員であるのに対して、後者が公開の対象としているのは一般市民です。対象が異なるわけですから、実施の趣旨も違っています。前者は主に教員の研修、特に教育のスキルの向上が目的となるでしょうし、後者は一般市民の啓蒙や大学の地域貢献が目的であると言えるでしょう。

経営情報学部では、両者の違いを踏まえた上で、前期の土曜日に実施している公開授業「元氣の出る経営学」を今年度の授業公開にあてることにしました。その大きな理由は授業公開を教員の研修の一環として行うことは、大学においては様々な困難があるということです。これが高校であれば、教科の内容が確定しており、また校長や教務主任という役職者の監督の下での適切な「指導」も難しいことではないでしょう。しかし、大学という組織においては、各教科における教育内容、教育方法、評価のすべてが個々の教員の責任において行われています。もっとも、この点ではいわゆる理系の学部（特に薬剤師の国家試験合格を教育の大きな柱としている薬学部）と文系の学部では事情が異なるかも知れません。文系学部の中でも、経営情報学部で開講されている授業の内容・分野は、経営学・会計学・経済学・情報科学・社会学・心理学・倫理学など多岐にわたっており、教育スキルの向上という点だけに焦点を絞るとしても、自分の専門外の分野に対して有効な指導がなされるとは考えにくいものがあります。さらに言うならば、授業スキルの向上は授業内容の改善と一体のものであると思われます。殊に昨今言われる学力低下の時代にあっては、学部全体のカリキュラムの編成をどうするかという問題は緊急の課題です。経営情報学部では昨年大幅な改組を行いました。カリキュラム改革の成果について点検・改善を継続的に進めていかなければならないことは言うまでもありません。

話を授業公開に戻しましょう。公開授業を授業公開にあてたのは、単に上に述べたような授業公開に内在する困難があるという消極的な理由からではありません。公開授業はすでに述べたように一般市民への啓蒙、大学の地域貢献が主目的ではありますが、一般に公開されているという点で、担当教員にとっても緊張感を伴ったものになりますし、わかりやすい授業をするために様々な工夫をすることも必要です。その点では担当教員にとって教育スキルの向上の機会にもなりうるものです。さらに同僚教員の受講も他の授業のない土曜日に実施しているために、ある程度の数の参加者を望むこともできます。相互に授業を参観することによって新たな交流も生まれると思われます。このように公開授業は授業公開として利用することには合理性とメリットが十分に認められると本学部の FD 委員会では判断したわけです。

公開授業（公開講座）は前期・後期とも実施されていますが、前期では4月から合計13講開講されています。うち今年度は学内講師の担当した講義が8回、学外から講師を招いて開講したものが5回です（ちなみに後期も寄付講座として「情報倫理・セキュリティと地域コミュニティ」というテーマでの公開授業が予定されています^注）。13回の授業のどれもが「公開」されているわけで

すし、それぞれの公開授業が授業公開というFD活動の一環であるとも言えるわけですが、今回は株式会社ジャストシステム社長浮川和宣氏を招いた第12講「変わりゆくIT～スリリングな情報産業～」を特に推薦することにしました。一流企業の社長が若い学生と一般の受講者に対して熱っぽく語る姿を見ることによって、我々教員もいろいろな意味で裨益されることが多いのではないかと判断したからです。

浮川氏は、講義の中で自らが手がけた日本語変換のソフトウェア開発についてのエピソードを紹介しながら、情報産業の可能性について語っておられましたが、単にビジネスの話題にとどまらず、未来に向けて自分の人生をいかに切り開くかという人生論にまでテーマが広がる大変に興味深いものでした。学生の感想にも大変感銘を受けたというものが多かったように見受けられます。教員も5～6名の参加がありました。

FD活動は日々の教育活動における研鑽の積み重ねと決して無縁のものではないはずです。特に大学の外部との交流によって得られるものは大きいのではないのでしょうか。授業公開がねらいとする授業スキルの改善という観点から見ても、今回の浮川社長のお話からは多くのヒントをいただいたのではないかと考える次第です。

注：後期の講義予定は、以下のようになっています。ご興味のある方は、是非ご参加下さい。講義の詳細に関しましては、経営情報学部事務室までお問い合わせ下さい。(下記の講義は、すべて土曜の2限目です)。

「情報倫理・セキュリティと地域コミュニティ」講義予定

| 日 | 講義テーマ | 講師 |
|-------|----------------------------|-------------------------------|
| 9/30 | 情報倫理とセキュリティの概要 | 摂南大学 経営情報学部長・教授 島田達巳 |
| 10/7 | 情報セキュリティ監査 | 大阪成蹊大学 助教授 井戸田博樹 |
| 10/14 | 倫理学と情報倫理 | 摂南大学 経営情報学部 助教授 有馬善一 |
| 10/21 | 市民と行政の地域コミュニティ | 関西情報化維新協議会 副理事長 戸谷壽夫 |
| 10/28 | 企業におけるリスクマネジメントとセキュリティ | 東京ガス株式会社 監査部 課長 島田裕次 |
| 11/4 | セキュリティ技術の基礎 | 京都大学学術情報メディアセンター 助教授 上原哲太郎 |
| 11/11 | 子供とIT | 摂南大学 経営情報学部 教授 松永公廣 |
| 11/18 | 情報社会の構造とセキュリティ | 情報セキュリティ大学院大学 学長・教授 辻井重男 |
| 11/25 | 企業の情報倫理とセキュリティ | 関西電力株式会社 経営改革・IT本部 下村匡 |
| 12/2 | 地域コミュニティ活動による安全・安心まちづくり | 安全システムサポートセンター関西 理事 須谷修治 |
| 12/9 | 世界の個人情報保護と日本 | 中央大学大学院法務研究科 教授 堀部政男 |
| 12/16 | Challenged (障害を持つ人達)の自立とIT | プロップ・ステーション 理事長 竹中ナミ |
| 1/13 | 地域の安全安心向上への地域経済学的アプローチ | 摂南大学 地域連携センター長・経営情報学部 教授 山根敬三 |

第一回外国語学部FDフォーラム報告

FD委員会委員 外国語学部 西川眞由美

2006年7月15日(土)、摂南大学寝屋川キャンパスに今年度から新しく建設された10号棟3階プチテアトルにおいて、外国語学部FDフォーラム「イマージョン教育から学ぶ早期英語教育のあり方」と題する講演会が開催された(摂南大学外国語学部主催、寝屋川市教育委員会後援)。加藤学園英語イマージョンプログラムディレクターとして日本で初めて英語イマージョン教育を開始し、バイリンガル教育を実践しておられるマイク・ポストヴィック博士を講師としてお迎えし、内外から80余名が参加した。

参加者からのアンケートは35枚回収され、今回のフォーラムに対する満足度に関する項目に関して29枚から「満足」との回答を得た。さらに、この講演によって得られた情報として、「イマージョン教育そのものの存在」、「イマージョン教育の可能性・魅力」、「イマージョン教育によって、母語の習得や文化理解を妨げられないこと」などが参加者からあげられ、従来懸念されてきた英語早期教育に関する新たなアプローチ・取り組みであるイマージョン教育の内容が大変興味深いものであったことを物語った。さらに、高校・大学でイマージョン教育を取り入れた授業への可能性・意欲を示唆する意見や、イマージョン教育に関するさらに詳細で具体的な情報を求める声も同時に寄せられた。

今回のフォーラムの開催により、次のような効果があったと考えられる。1. 英語教育に関する新たな情報や認識が、中学校・高校・大学の英語教員の間で共有されるのに役立った。2. 本フォーラムを公開することによって、摂南大学外国語学部の活動の一端を地域の教育関係者たちに紹介できた。一方、反省点としては、講演が英語で行われたので(同時・逐次通訳なし)参加希望者が限られてしまったことがあり、今後は講演の仕方などにいっそうの工夫が必要であろう。

以下に、当日講演されたイマージョン教育に関する概要を掲載する。

講演概要

「イマージョン教育から学ぶ早期英語教育のあり方」

講師：Dr. Mike Bostwick

(加藤学園英語イマージョンプログラムディレクター・暁秀中・高等学校副校長)

言語イマージョン教育とは、カナダのケベック州で始まったとされるバイリンガル教育の一種で、一般教科を外国語で学ぶ、つまり、新しく導入される言語を媒介として学習し同時にその言語を習得することを目的とする教育である。イマージョン教育を受ける児童・生徒は、母語の運用能力を

損なうことなく外国語能力を身につけ、授業内容を理解するとともに、それについて討論する機能的言語能力を習得し、自国の文化と他国の文化の両方を理解し尊重できるようになることを目指す。今日、英語が世界共通語になりつつあり、次世代をになう子供達に広い知識と高い英語運用能力が望まれるなか、新しいバイリンガルプログラムとして注目を浴びている。

加藤学園で行われているイマージョン教育は、日本語を母語とする児童・生徒が第二言語の英語をひとつの教科としてではなく、手段として使うことにより一般教科内容を学習する形態をとり、機能的な英語能力を身につけ、かつ日本人としてのアイデンティティーを保持しながら異文化への意識を高めることを目的としている。例えば、幼稚園のプログラムでは朝十時から午後二時までの50%を英語母語教師と過ごし、さまざまな活動や行事準備を通じて英語や外国の文化に触れる。小学校では、パーシャルイマージョン（部分的イマージョン）を取り入れ、文部科学省のカリキュラムをもとに、1日の50% - 70%が英語での授業、残りの時間を日本語での授業としている。中学校・高校のバイリンガル・コースは、文部科学省のカリキュラムに基づき、国際バカロレア・プログラム（MYP 中等課程/DP 大学入学資格）を導入した教科課程を持ち、40% - 80%の授業が英語で行われる。（MYP（中等課程）は、中学1年から高校1年までの4年間のコースであり、DP（大学入学資格）は、高校2年から高校3年までの2年間のコースをさす。つまり、“バイリンガル・コース”とは、文部科学省のカリキュラムとMYP、DPを組み合わせたコースで、英語と日本語で学ぶ、6年間のコースである。）

加藤学園では、内容重視のイマージョン教育が行われている。英語を使用して授業を受けるための有意義な背景や動機付けを準備するとともに、十分な理解を可能にするために具体的経験や内容補強システムを充実させている。その結果、懸念された学業成績そのものへの負の影響はほとんど見られないどころか、1. 日本の文化について意識が高まるとともに、多くの知識を持ち、理解に対する認識を高めている、2. 世界の文化について広く興味を示すようになる、3. 機能的に英語を使い、コミュニケーションできる能力を習得することが出来る、などの成果が観察されてきた。

従来、日本では、早期バイリンガル教育にはさまざまな反論がなされてきた。例えば、母語が確立する前に外国語を学び始めることによって母語自身の発達が妨げられる、自国へのアイデンティティーを失う、などといったものである。しかしながら、イマージョン教育は大部分の生活環境が母語である中で外国語を学ぶ、いわゆる付加的バイリンガリズムの形を取っているのでその心配はない。アイデンティティー調査でも、イマージョン生徒は、異文化への意識が高まっていると同時に自国の文化への意識・認識も同時に高まっていることが明らかにされている。それは、母語（自国の文化）と外国語（異文化）との両方にさらされることによって、常に両者を比較する習慣づけが出来ているからであると考えられる。結果として、さまざまな国の先生方、友人と接することによって、多様な価値観を受け入れ広い視野を持った考え方が身につくのではないかと考えられる。さらに、一般教科に関する学力に関しても、レギュラーコースの生徒と比べてイマージョン生徒との間に大きな学力差は見られないことが加藤学園における小学生・中学生の学力調査で実証されている。

イマージョン教育を推進・成功させることは決して容易なことではない。例えば、イマージョン教育プログラムを推進するには、十分な言語能力と担当教科に対する十分な知識、高度な教授力を持った教師陣の確保が必要になる。さらに、小・中・高の各段階で一貫し、統合された教育プログラム、適切で十分な教材の作成、またそれを支える十分な資金の確保など、さまざまな課題が山積している。しかしながら、豊かな人間性と国際的視野を持ち、さらにネイティブスピーカーのレベルに近い英語運用能力を持った人材を育成するために、今後ともイマージョンプログラムを押し進めていきたいと考えている。

以上

お知らせ

* 薬学部 FD フォーラム

9月11日(月) 13:30~15:45 「6年制薬学部における学習支援の在り方」のテーマで薬学部 FD フォーラムが開催されました。この報告は次号の FD ニュースに掲載される予定です。

* 全学 FD フォーラム

全学 FD フォーラムについては、「FD活動の再定義」をテーマに開催し、FD活動とは何なのかを全教職員が再度原点に立ち返り共有したいと考えています。開催時期は年度末の2月または3月の予定です。

* FD 活動に関するホームページ

巻頭言にありますように、FD 委員会ではホームページ立ち上げの試行を FD 委員会内部で行っています。このことに関して教職員の皆様のご意見・ご質問をお待ちしていますのでよろしくお願いたします。

FD委員会から

「2006年度前期の学生による授業アンケート」の実施に際し、ご協力いただき有り難うございます。皆様からのご意見を紙面でも紹介したいと考えています。随時、メールで結構ですから、FD委員もしくは教務課までお寄せ下さい。(kyomu@ofc.setsunan.ac.jp)
次号のFDニュース第19号は2006年12月頃に発行の予定です。